

久しぶりに会ったポランティアと外食



今を生きている子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

②

「美容師になりたい。ほくにはほかに選択肢がないから」。都内の専門学校に通うヒロキ（17）はいいました。

ヒロキの両親はヒロキが幼いころに離婚しました。ヒロキと弟は近所に住む母方の祖父の援助も受けながら、母親に育てられました。母親は精神的に不安定で、仕事も続きません。小学校6年の冬、母親が入院すると、ヒロキと弟は祖父の家に行きました。夜遅くまで友だちの家に

に入り浸る、欠席が増えるなど、生活が荒れ始めたヒロキ。母親が退院して母子3人の暮らしに戻っても、ヒロキの生活は落ち着きませんでした。

面談後に母が：

母親は、思春期の長男の度重なる外泊や不登校、親への反抗に「どうしていいかわからない」と、ママ友にもうらました。母親たちが「聞いてあげることしかできないけれど」と、連絡をとりはじめた夏の初め、ヒ

「美容師になりたい」

ロキの母親の死が知らされました。

自殺でした。その3日ほど前に学校の個人面談がありました。「お母さんがちゃんと登校させないと」といわれたという内容のメールが最後だった」とママ友の一人はいいました。ヒロキの母親は不眠のために薬を服用し、朝起きるのが大変だったことを別の母親が知っていました。

みんなで見守る

母親たちはヒロキの祖母と連絡をとり、ヒロキと弟をみんなで見守っていこうと相談しました。

ヒロキの不登校は続きました。「明日は行く」と約束しても、夜なかなか寝付けず、起きられない。やっとの思いで登校しても「別室指導」が待っていて楽しくない。

「学校に行く意味がわからない」といいました。不登校の仲間と「つるんで」時間を過ごしました。酒、タバコ、万引き……。週末は仲間が住むアパートの一室で、「オール」(徹夜でゲームをしたり語り明かしたりする

こと)。そのころ、同級生の別のたまり場に通ってくる学習支援のポランティアの学生と知り合いました。

「荒れ」は続きましたが、ポランティアの学生はいつもヒロキと仲間たちの話を聞いてくれました。中3の春、祖父母の家の近くの学校に転校しましたが、つながりは切れませんでした。ときどき夕食を一緒に食べたり、遊んだり。「笑顔が増えた。生活が落ち着いて将来のことも考えられるようになったみたいだった」と、ポランティアの青年が語ります。

祖父母の援助で専門学校に進学できました。「美容師の仕事はおもしろいと思う。勉強は正直つらいこともあるけど、生きていかなければいから」

「ツイッターでは元氣そう。就職できたかどうか、聞かなくちゃ」とポランティア。母親を亡くしてから5年。ヒロキは自分で自分の将来を切り開こうとしています。

(文中仮名。じつじつ)